今井小だより

横浜市立今井小学校
令和５年１月１０日
学校だより　１月号

学校教育目標　：　か　が　や　い　て　い　る　子　　「自分大好き！今井大好き！」

たすきをつなぐ

学校長　松永　史郎

穏やかな天候に恵まれる中、令和５年、2023 年を迎えることができました。それぞれのご家庭では、どのようなお正月を過ごされたでしょうか。

私は、今年のお正月、家でテレビを見ながらのんびり過ごしていました。お正月のテレビ番組というと「箱根駅伝」を思い浮かべる方も多いでしょう。お正月の一大イベントとして定着している行事と言ってよいと思います。でも、箱根駅伝（正式名称は「東京箱根間往復大学駅伝競走」）は、実は関東の大学のみの参加で行われる大会で、九州に住む親戚に聞いてみたら、大会のことをほとんど知らなくて驚いたことがありました。ただし、来年の大会は第１００回の記念大会のため、予選会を全国の大学に門戸を広げて開催されるそうです。

ところで、以前、5～6 年生のときに担任した教え子が、箱根駅伝の強豪校に推薦入学したことがありました。彼は小学生の頃から、区のロードレース大会で毎年優勝しており、進学の報告を受けたときに「やっぱり、さすがだな。」と感心しました。彼が成人式を迎え、同窓会で再会したときに、「本大会出場をめざしてがんばっているけれど、ライバルが多くて現実は厳しい。」と言っていました。毎年、彼の姿を求めて、テレビを見ていましたが、ついに卒業まで彼が走る姿を見ることはできませんでした。それでも、一瞬だけ、走り終えた選手を介助する彼の姿がテレビに映ったときには、それまでのがんばりに思いが行き、目頭が熱くなったことを今でも覚えています。

さて、そんな箱根駅伝を象徴することの中に「たすきをつなぐ」という言葉があります。文字通り、駅伝の各中継所では、前の走者から次の走者へとバトン代わりのたすきが渡されていきます。選手は、正に「次の選手にたすきをつなぐ」ことだけを目標に必死になって走っているのです。

箱根駅伝では時に残酷な様子も見せつけられます。その一つが「繰り上げスタート」です。国道をコースにしているためでしょうか、一定の時間内に中継所に到達できないと、たすきが渡る前に、次の選手が強制的にスタートさせられます。毎年のように、もうあとほんの数秒、目の前のところで非情のピストルが鳴り、たすきを渡せなかった選手も、スタートした選手も涙を流す様子がテレビの画面に映し出されます。また、総合順位が１０位以内に入らないと翌年のシード権を得られないために、優勝争いと同様に、１０位に入るかどうかのせめぎ合いがあります。ここでも、わずかな差でシード権を得られなかったチームの悔し涙を目の当たりにします。でも、そのように、たすきをつなぐことができなかった選手の肩を抱きかかえながら、慰めや励ましの言葉をかけるチームメイトの様子は、見ている私たちの心も癒してくれます。

箱根駅伝の人気の秘密は、このように、上位チームの快走だけではない数々のドラマが見られるからなのかもしれません。

たすきをつなぐことができなかった選手は、悔しさのあまり自分を責めてしまうこともあるでしょう。でも、考えてみると、本当は、大会の結果よりも、彼らのそれまでの努力と、厳しい練習を共に乗り越えてきた（私の教え子のように本大会に出場できなかった選手も含めて）全ての仲間との絆こそが、選手一人ひとりにとっての一番の財産なのだと思います。そういう意味で、選手たちの「心のたすき」は数々の試練を通してもなお、次の年へと確実につなげられているのかもしれません。

学校も年度末を迎え、次の年へと「たすきをつなぐ」時期になります。学校も、学校だけの力ではなく、保護者や地域の皆様など、周りからの応援やサポートがあってこそ前へ進むことができるのだということを改めて確認しながら、新年度の準備に取りかかって参ります。

新しい年が、本校を支えてくださっている保護者や地域、全ての皆様にとって輝きのある１年になりますことを心よりお祈りいたします。